

わなぐら 和名倉 百年の森



目次

- 10周年に向けて・・・・・・・・・・・・・1
- 和名倉のブナ植林について・・・・・・・・・・・・・2
- 第3回「山吹沢森づくり」のご案内・・・・・・・・・・・・・5
- 和名倉の水源地域
 - その1 井戸沢遊歩道・・・・・・・・・・・・・6
 - その2 大洞川惣小屋谷・・・・・・・・・・・・・7
- 仁田小屋早春譜・・・・・・・・・・・・・9
- 「埼大エコサロン」の開設・・・・・・・・・・・・・9

10周年に向けて



百年の森づくりの会 会長 内藤 勝久

活動が始まって8年目。あと2年もすると10周年の節目を迎える。山登りにたとえれば1合目近くまで来たことになり。試行錯誤と失敗の連続だったが、互いに慰め励ましあつて、難所を乗り越えてきた。そしてその踏み跡がこれからの活動のインフラとなっている。高い志が形となって表れてきたのだ。

創部40周年の記念事業が「源頭の一滴」となつて源流をつくり、百年の森テラス 百年の森づくりの会 広報誌「和名倉百年の森」 一步の森 大陽寺 中津川山吹沢 仁田小屋 ホームページなどの沢を集め、今また子供たちが合流し、大河への胎動さえ感じられるようになってきた。

さてこれからの2年間は10周年の節目を確実に刻むことに専念したい。具体的には、「一步の森」の完全復元、事務局体制の強化、「百年の森テラス」の有効活用、ホームページの充実、会員増強などである。

「一步の森」復元のためには、緩やかな作業道の敷設とそれに関わる指導員を含む要員の確保、苗木の確保が不可欠である。また事務局体制の強化は「百年の森テラス」の有効活用およびホームページの充実によって実現可能である。先日の理事会で「百年の森テラス」を「埼大エコサロン」にしたい、とのかねてからの構想を披露したところ反響は上々であった。テラスを環境に関心の深い埼玉大学の教官や学生のたまり場にして、大きな夢を語り合ってもらい、また市民に対する講演も随時行なうなど情報の発信基地としての機能も持たせ、近い将来大学と市民が一体となった「埼玉大学百年の森づくり」を立ち上げたいと思つている。

これらの事業は、多くの会員の協力があつて初めて実現するものである。植栽ばかりでなく作業道の敷設で汗を流すグループがあつたり、埼大エコサロンを運営するグループあるいは広報誌の編集に

携わる会員など、それぞれ得意とする分野で活動に関わつていただければ、「百年の森づくりの会」への親近感も倍加するに違いない。

さる2月16日地球温暖化防止のための「京都議定書」が発効した。世界の足なみが揃つたわけではないが、大きな第一歩を踏み出した意義は大きい。何よりも「木を切つては植える」固有の文化を持つ日本の、しかも京都が世界プロジェクトの会議の舞台となつたことに、私は日本人として爽やかな誇りを感じる。いづれ植林は「ジャパニーズスクール（日本のかつこよさ）」の代表として世界から高く評価される日が来るに違いないと確信している。

時代の追い風を受けて、ゆっくりとしかじつくりと一つ一つの活動を固め、10周年の節目をきっちり刻んでいきたい。

和名倉のブナ植林について

常務理事（植林担当）野澤和雄

埼玉県下最大の山林火災により焼失した和名倉山（白石山 標高二〇三六m）の森を『水を育む山への恩返し』として復活させよう！』という呼びかけに、多くの方たちが感銘し共感を寄せていた。荒川だきました。荒川の水源の山である和名倉山は、県境を他県と接する甲武信岳や三宝山と異なり独立峰としては埼玉県では最も高く、その大きな山体や登山ルート（ト）の少なさから、豊かな自然が残された貴重な地域となっています。秩父の山々は金山などの豊富な鉱物資源と森林資源から江戸時代には天領とされ保護されてきました。和名倉山は、その中であつて地域の共益利用が許された入会山（いりあひ）（百姓稼ぎ山（ひやくしやくかぎやま））としての歴史をもち、大滝村村有林（現秩父市）や共有林として三〇〇〇ヘクタールが残されています。私たちは「水源の森はみんなで守る」ことを活動の柱としながら、和名倉の森林再生と保護のため活動に取り組んできました。スズタケの藪に覆われ廃道となつた道の整備や山頂までの植生調査、ブナの植林や森林保全の拠点となる仁田小屋の再建などに取り組んできました。大切な水源の森を涵養する植林や森林保全の活動は、治山治水につながり、陸から海への動植物を育み、地球全体の環境保全につながっていきます。この和名倉の森をどのような森として守っていくのか、今後の植林方法をどのようにするのかなど多くの課題が残されています。

mから広葉樹の二次林がはじまり、標高一四五〇mの「イヌブナ平」と命名した広い尾根には、ブナ、イヌブナ、ミズナラ、ウリハダカエデなどの広葉樹種が美しい林相を見せています。この地域は、山林火災の時に焼失をまぬがれた地域で、大きなブナやイヌブナが残る太平洋側の典型的な天然林となっています。このイヌブナ平に突き上げる仁田小屋沢の沢筋は、カツラ、シオジ、サワグルミ、トチなどの天然林からなり、サルナシやヤマブドウなどのつる性植物も多く、シカやクマなどの野生生物にとつては最後の楽園ともいえる地域です。天然林として残されたこれらの地域は、人の手を入れず

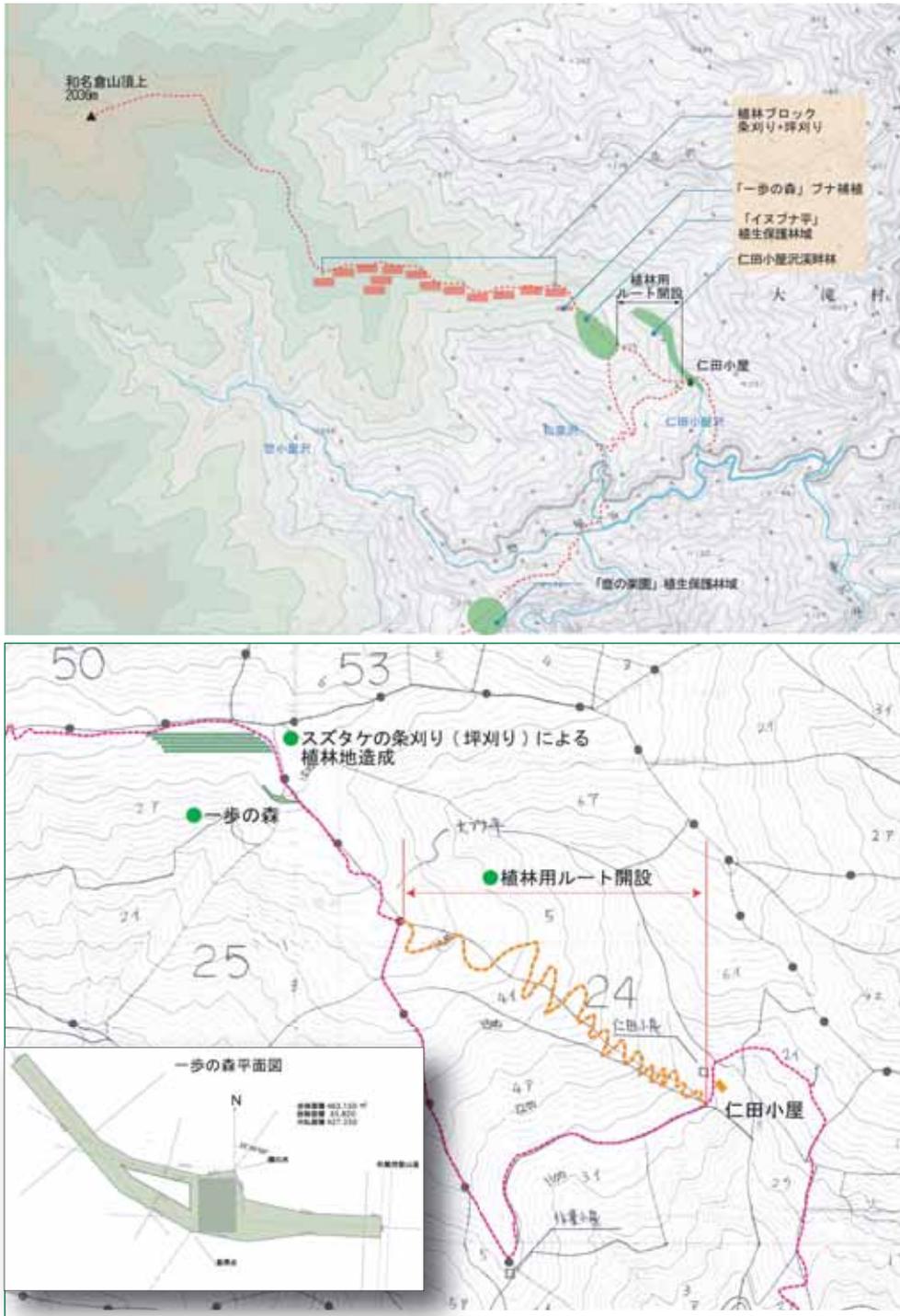
に保護していくべき貴重な地域となっています。一四五〇mより上部からは山林火災の後に植林されたカラマツとカンバやリョウウブなどの二次林となります。私たちは、この地域にブナやミズナラなどの広葉樹種を植林することによって、より自然度の高い森林に誘導していきたいと考えています。現在はまばらなカラマツ林となっている仁田小屋尾根南面域が、ブナやミズナラの大きな森林になつたら、新緑や秋の紅葉のとき、みごとな景観を示すのではないのでしょうか。今でも和名倉には大きな切り株が残され、かつてはどれ程豊かな森林であつたかが想像されます。日本の森林は国土の約7割を占めていますが、そのうちの半分がスギやヒノキの人工林、残り半分が天然林です。その天然林の多くは、これまで



イヌブナ平付近のブナ・イヌブナ林



幹周り3mのミズナラ



の開発によって伐りだされ、森林資源としても見捨てられたままの貧困な二次林となつていっているのが日本の森林の姿といわれています。私たちは、今までの経験に学び次のような対策をこつじながら、百年をかけてこの和名倉の森をみどり豊かで、生き物で満ち溢れた

森にしていきたいと考えています。これまで和名倉のブナ植林では、東京大学秩父演習林から六年～八年生の苗木を譲り受け、二〇〇一年六月十三

本、二〇〇二年六月十三本、二〇〇三年五月二十五本を植栽しましたが、充分に活着せず良好な成績が得られていないのが現状です。これまでの経験を踏まえ、今後の改善につなげていきたいと考えています。

一、植栽時期について
広葉樹の多くは、春先の開葉とともに新しい根を広げて水を吸い上げていきますが、この時期に移植すると、根をいためやすく枯死することが多くなります。苗畑で大きくなった苗木を移植するためには、事前に根切りや根回しをして、移植のストレスに耐えるように苗木を仕立てておく必要があります。ポット苗に仕立てた苗であれば、植栽時期の制約を免れることができます。また、平地の苗畑で育てられた苗木を開葉まえの三月上旬までに山に仮に移植（仮植）することで、山の温度環境にならぬ植林のときのストレスを減らすことができます。さらに、開葉の時期をコントロールする技術として、前年の十二月に休眠状態のまま冷凍保存する技術も活着率を高めるうえで成果をあげています。日本列島の中緯度にある埼玉県は、全国的な苗木の生産県でもありますので、ブナの冷凍保存技術を秩父産の樹種の育苗に応用することも考えられます。ポット苗の春植えと秋植えの比較、冷凍保存苗の採用など和名倉での植栽時期について検討をすすめる計画です。

二、植栽方法について
林床のスズタケの根を充分取り除き、根周りに空気が入らないように土を踏み固めること、

植栽苗の周りの乾燥をさけること
(坪刈りまたは条刈りにより植栽環境を確保すること)、

移植時の根に捲かれている珙は、高冷地であるため腐食が望めず、そのまま植え込むと根の発育にはよくないため必ず取り除くこと、など。

三、シカの食害対策について
近年のシカやカモシカの個体数の増加は、植林にも大きな影響を与えています。山に植えた苗が食害のため全滅することがあり、苗を植えても木にならないと地元の多くの方が嘆かれています。現状があります。苗ばかりではなく直径三〇センチ以上に育った成木でも地上二メートルまで樹皮がはがされる



樹皮が剥がされたウリハダカエデの成木

被害を受けています。樹幹の周りの大切な形成層を半分以上傷つけられると、その木は枯れてしまいます。丹沢の森林衰退の一因に、シカの食害があげられています。和名倉でも苗木保護のための食害対策は不可欠となっています。

ブナの苗の確保について

生態保護の観点から遺伝子の攪乱を抑えることが議論されていますが、秩父の山からとった樹種のドングリから苗をそだて、秩父の山に返すことを基本に四年前から育苗を行ってきました。ミズナラについては、すでに植林が可能なるまでに成長した苗もあります。ブナ・イヌブナに関しては、山採苗(山引苗)を採取し育苗すること、

ドングリを採取するための母樹の選定や採種時期の確定、苗畑の整備などを通して、確実な苗木の確保に努めていきたいと考えています。また、苗木を多くの会員の方に自宅で育てていただき、育った苗木を山に返す森づくりの「循環システムづくり」にも取り

組んでいきたいと考えています。
作業道の整備について

植林作業、地拵え、下刈り作業の円滑化と危険回避のため、仁田小屋から植林地まで新しいルートを開設します。作業道の開設は、植林地の見回りや森林の観察にとっても必要ですが、多くの会員の皆様が安全に植林作業に参加していただくためにも必要になります。「山の肥やしは、人の足跡」といわれていますが、より多く森に関わることを求められるのは、人工の造林地ばかりではありません。森林保全のために作業道が果たす役割は大きいといえます。



仁田小屋近くにつけられた巣箱に小鳥が営巣を始めました。

第十六回 和名倉山 百年の森づくりにワークへの案内

■日時

5月28日(土) ～ 29日(日)

■作業内容

①ブナ試験植林(「一歩の森」補植)

食害保護材の設置

②作業道開設・整備

今回の作業道の整備は、道づくりの指導をかねて専門家をお願いしています。

参加ご希望の方は、5月16日まで
に、氏名・住所・電話番号を明記の上
八ガキ・FAX・電子メールにてお申し込みください。詳細をご連絡いたします。

お申込先

〒336-0015 さいたま市南区太田窪二〇三四-一
百年の森づくりの会 事務局

電話 〇四八・八八五・六六九七

FAX 〇四八・八八二・〇二四五

e-mail: k.naito@naitohoken.co.jp

5月21日
(土)

第3回中津川県有林

「山吹沢の森づくり」のご案内

山吹沢県有林で大切に育てられたス

ギは、いま埼玉県立武道館の大きな屋根に活かされています。そのスギの伐採跡地に新しい森づくりをはじめ、3年目、太陽の光をいっぱいあびて少しずつ森林が育ち始めています。今年はずつずつミズナラの苗木140本の植栽を行います。この苗木の中には、私たちの会でドングリから育てた苗木も含まれています。秩父の山からドングリを拾って育て、秩父の山へ返す初めての苗たちです。会員の皆様の中には、秋のワークや観察会に参加されて、自宅で苗を育てている方もいます。樹高で50センチ程に育った苗でしたら山に戻すことができますので、この機会にぜひお持ちください。

植林作業後、前浦和第一女子高等学校校長の牧野先生のご指導による自然観察教室や岩田泰典氏による山菜教室を企画しています。山吹沢のスギ伐採

跡地は、太陽の光をうけて、数多くの植物がいつせいに育ちはじめます。植

生遷移の劇的な変化をおいながら、植物をひとつひとつ観察します。森はまた春の山菜、秋の木の実やきのこなど豊かな恵みを与えてくれます。山の恵みに学びながら、山菜や木苺を探します。

■日時

五月二十一日午前10時

■集合場所

中津川「こまどり荘」前集合

秩父鉄道など公共の交通手段をご利用の方は、送迎バスをご利用ください。

※秩父鉄道三峰口 午前九時00分

出発予定

■スケジュール

九時30分 受付開始（中津川）

十時30分 植林作業

十二時00分 昼食

十二時30分 自然観察教室

山菜教室など

十五時00分 終了

十五時30分 中津川解散

（三峰口までバス送迎）

■持ち物

長ズボン・長袖シャツ・帽子・雨具・

タオル・軍手・昼食・水筒

■参加費

大人1000円（小・中学生無料）

※宿泊（中津川キャンプ場）を希望される方は、大人3000円（小・中学生無料）

参加ご希望の方は、氏名・住所・電話番号・送迎バス利用希望の有無・宿泊希望の有無を明記の上、四月三〇日までに事務局まで八ガキ・FAX・電子メールにてお申し込みください。

お申込先

〒336-0015 さいたま市南区太田窪二〇三四-一

百年の森づくりの会 事務局

電話 〇四八・八八五・六六九七

FAX 〇四八・八八二・〇二四五

e-mail:k.naito@naitohoken.co.jp



●植林地の全景

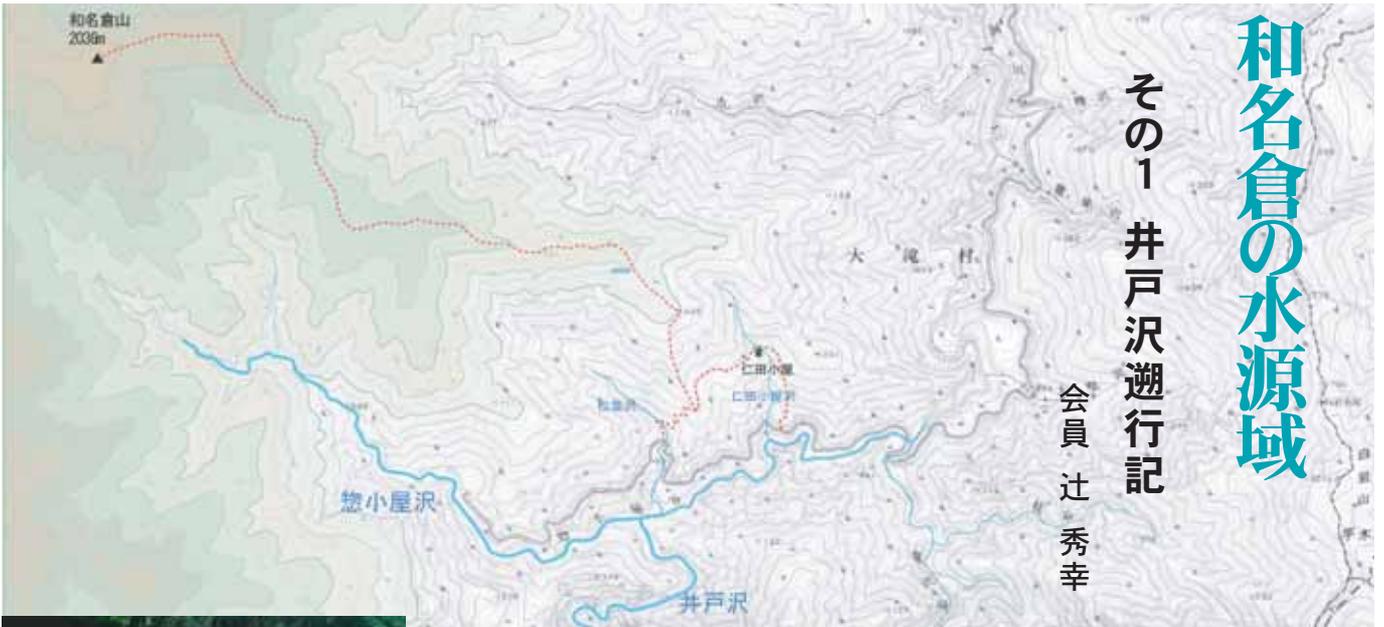


●2004年5月植林作業

和名倉の水源地

その1 井戸沢遡行記

会員 辻 秀幸



左下が筆者

和名倉へブナ植えに何回も林道を往き来しているのに、その谷底の沢を極めていないのはなにか釈然としない。だんだん気持ちが悪くなってきて、昔ながらの登山仲間にも声をかけると、みなすぐに応じてくれる。

何回か山で九死に一生の目に遭いながら解脱できない最年長の僕の四名。二〇〇四年七月十七日、八時三〇分身支度を終えて本流に惣小屋沢が出会う二股を出発。今日も暑くなりそうで、水の冷たさが気持ちよい。ワクワクしながら小滝を越え、青く水をたたえた釜や豊かな水量の淵をへつっていく。ときには水深がへそのしたくらいになるが、小振りなO嬢には胸近くになり、にぎやかな奇声が出る。そんなとき、ロープを差出したり細かくルートを指示するS君は並々ならぬ気遣いをしてまさに男の鑑となる。

井戸沢の名所は何といつても「キンチチミ」だ。O嬢は「私は縮むものが無いから大丈夫」とあわてる風でもない。入口は二段の滝がこまごま、ドウドウと音をたてて水が落下し手の付けようもなく、左側の窪みから高巻き、懸垂下降で滝上の川床に降りる。ゴルジュをへつり滝を越え、愉快的な沢歩きが続く。

やがて明るい川原となり、右側の台地を見て今日のヒバークサイトとする。三時半着。



30mの大瀑

寝場所の整備、木から木へザイルを渡しタープを張る。食事はO嬢の独壇場、スタミナの源となる天婦羅を涼味あるソーメン。男たちは水くみ、火づくり、盛りつけを手伝い、後は頼まれるだけだ。僕も釣果のない岩魚釣りをさつさとあきらめ、食事に加わる。翌朝朝、タープをうつ沛然たる雨音に目覚める。誰かが寝たままの姿勢で足を突きあげてタープに溜まった水をこぼしている。七時三十分、出発の頃再び夏の青空が緑の葉の上に広がっている。目の前の水の流れは変わらず、さっきの雨の増水の恐れはない。しばらくして十mのF2に出会う。ここも湿ったルンゼから巻き、S君がゆっくりザイルを伸ばしていく。再び懸垂降下となり川床に降りゴルジュ、

滝、淵、倒木を越えていく流程が長いので先を急がなければならない。

倒木帯の向こうにF6 二十mの大滝が現れる。見上げていると滝口から落下する水の飛沫をあびて眼鏡が曇ってくる。K君もビデオカメラをゆっく

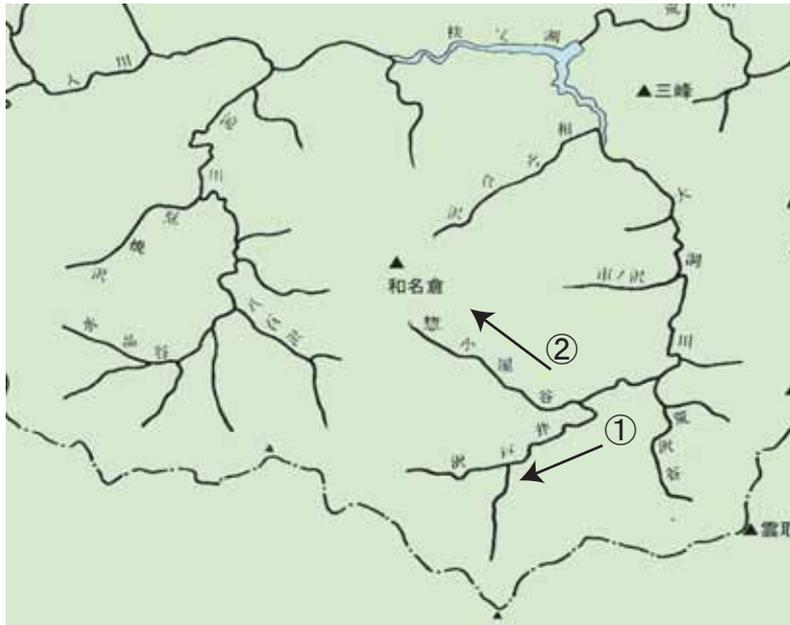
り上下させて滝の全容を納めている。少し戻って左側の急なガレを登り小さな稜から懸垂下降で川床へ降りる。この沢の三つの通らずはみな同じ手順で

捲いたことになる。

再びゴルジュの中を行くと、深かつ

た谷が開けてきて流れが細く浅くなる。熊笹の中の踏跡を行くようになり、唐松林の中の倒壊した作業小屋が現れる。

散乱した人間の生活の跡を突っ切って踏跡を這っていくと、間もなく確りした登山道に出た。それは、右すれば東仙波山から和名倉山へ続く道だ。



午後一時三十分、こうして井戸沢の遡行が終わった。

帰路は東仙波山から東に下る新しい登山道を下ったが、惣小屋沢より二百m上で夜となりピバーク。道は未だ判然としな

その2 大洞川惣小屋谷

会員 東 克明



和名倉は懐の深い山である。私たちは一部を垣間見ているだけかもしれない。植林のための作業道は尾根筋につけられているが、今回、沢筋から和名倉を目指してみることにした。山肌崩壊の全容は、見通しが良い尾根から眺めるのが分かり易いが、沢筋から近づくと、その痛々しさを感ぜられるのでは、とも思いつながら秋の大洞川に入谷したのは二〇〇四年九月。

高岡正彦会員がリーダー、辻秀幸会員は岩登りのベテランでこの山行の前には、より難易度の高い大洞川本流の井戸沢を遡行している（特集 その1）。高岡リーダーが顧問をしている高校山岳部の三人の部員と私を含めメンバーは六人。惣小屋谷は林道を利用することで遡行距離も縮められ、大洞川の中では比較的易しく、仁田小屋をベースとして活用しやすいこともあり、手始めに選んでみた。

九月二十三日午後、小雨、土砂崩れのため大洞林道鮫沢橋の袂で車を降り、二時間二〇分ほど歩き、十七時五〇分仁田小屋。二十四日、霧の中五時二十分、小屋を後にする。時間によってはピバークも覚悟、できるだけ小屋に戻りゆつくり食事と酒（大人のみ）を楽しみたいのは皆同じ気持ち。作業道を30分ほど進み松葉沢橋で大洞林道に降り立ち、所々上から土砂が崩れ落ちている

林道を進む。カモシカにも出会い、まもなくの林道終点（六時四〇分）は二万五千分の一の地図どおり、すぐ下の惣小屋谷に降り遡行の支度をして七時一〇分遡行開始。

あまり陽がさしこまず暗い渓ではあるが、小滝もあり初心者にとっては手頃な沢登り。釜のある数mの滝は腿まで水につかり滝に取り付く。右岸に大きなガレ場（斜面の崩壊箇所）があり、沢身まで埋め尽くしているゴロ（石

ころ帯)を過ぎ、二条に分かれた五mの滝は真ん中リッジ状を濡れながら登る。続いて、傾斜の緩い二段十mの滝は中段で小さな枝沢が左から合流、難なく通過。

この上からが核心部の(兩岸が切り立っている)ゴルジュ、惣小屋谷で一番の二葉瀑は落差十二丁十五m近づいて眺めてから右岸の踏跡を大高巻きで二葉瀑の上の八mの滝の上部に出る。高巻き途中の草付きトラバースは残置ロープもあるが少し緊張する所。

続く槌状の滝は左をへつりながら登る。続く七m程の滝は右岸を高巻き、ゴルジュ帯を出たところが焼小屋沢出合(九時二〇分)で左の本流を進む、気持ちの良いナメ滝をピチャピチャ歩いて芋ノ窪の出合付近で早めの昼食(九時四十分)。時々、沢身の岩に川海



林道で出会ったカモシカ



2段10mの滝



沢登りをはじめて体験する長島君(二葉瀑を背景に)



二葉瀑上の槌状の滝

苔が生えている。高校生も慣れてきたのか笑顔が初々しい。芋ノ窪の出合は右の本流へ、その直ぐ上にも小さなゴルジュ帯で水流の中を進む。小さなゴルジュ帯の上からは沢も開けてきて小さな平地も出てくるようになる。一七〇〇m付近の二股(三本木、十一時二〇分)は右の本流を進みさらに水量が

少なくなり、喘ぎながら高度を稼いで、丁度十二時源頭に到着。惣小屋谷の源の湧き水は渴いた喉に吸い込まれるようにうまい。ウエディングシューズを脱ぎ一息ついてから踏跡を右へ、千代蔵の休場を過ぎ十三時和名倉山、倒木が多く見通しは効かないが誰もいない落ち着いた頂上。

ここからは市ノ沢の頭を経て仁田小屋尾根の我々が作った作業道を一目散に降りていく。途中二回ほど休んで、

十六時三十五分仁田小屋着。心地よい疲れの中、本日の遡行を語り合いながら夕食。翌日、片づけ後下山。

高校生メンバー 長島敏洋(浦和北二年)、黒田昌史(浦和北二年)、鈴木慎平(浦和北一年)

浦和北高校山岳部は、顧問が「百年の森づくりの会」の高岡先生というところもあり、昨年、光岩小学校での仁田小屋づくりに参加しました。また、今年(〇四年)の七月十七、十八には仁田小屋に泊まって、仁田小屋尾根の草刈り・道づくりも体験しました。

さらに、前後しますが、今年の高等学校総合体育大会(五月十五日、十七日)において、仁田小屋をB・Cとして和名倉山、東仙波を歩き、自然あふ

れる和名倉山の魅力を満喫してきました。そして今回は、仁田小屋をB・Cとして沢登り(惣小屋沢)へ出かけました。出発の一週間程前に、沢登り用のシューズをそろえました。沢登りをするのは始めてなので不安と期待でいっぱいでした。歩き始めは滑りそうでした。不安で、ついに行くのがやっとでした。

いくつか滝を登ると、その楽しみがわかるようになり足下の不安がなくなっていました。陽が高くなり、暖かくなると沢の冷たい水が気持ちよく、快適な沢登りでした。ほぼ予定通りのタイムで和名倉山頂に到着できました。それでも、やはり緊張の連続で、仁田小屋までの道で疲れが吹き出しました。

仁田小屋へ着いたときには満足感と安心感が胸がいっぱいになりました。(長島敏洋 記)

仁田小屋

早春譜



●カツラの芽吹き



●あおい水を湛えた秩父湖



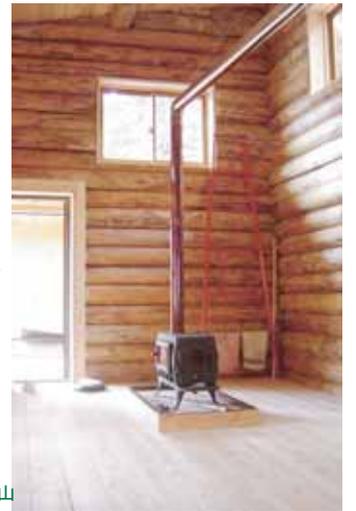
●早春の山を黄色く彩るダンコウバイ



●雪の残るブナ林



●仁田小屋の周りに多く自生するハシリドコロ。
有毒のためシカやウサギに食べられないことがない。
早春の植物のしたたかな知恵である。



●「イヌブナ平」の名の由来となったイヌブナ。明るく陽気な早春の
広葉樹林。林床のスズタケは以前にくらべ元気がない。森林衰退の始
まりでなければよいのだが・・・。



●開業まえのブナの大樹



●小屋正面に望む雲取山

「埼大エコサロン」を開設します

埼玉大学のキャンパスの片隅に、山小屋風の建物があります。この建物は、埼玉大学開学50周年を記念して今から5年前に、埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会の会員有志の寄付金をもとに建設されたもので、「百年の森テラス」と呼ばれています。このテラスを百年の森づくりの情報発信基地として、また植林や環境問題に関心のあるすべての教職員や学生の活動の場として活用していく計画です。また、環境保護に関心を寄せる市民のための講座開催などを計画しています。

「エコサロン」のスタッフは、サロンマスターに当会の副会長を発足時から務める本間俊司工学部応用化学助教授、事務局に会員の岩波靖夫さん、吉田兼紀さん、石関明穂さんが交代で当たります。

講座開催など今後の活動については、ホームページでご案内いたします。皆様のご協力とご参加をお願いいたします。



ホームページアドレス
<http://www8tok2.com/home/forest100/>

交通

- J R 京浜東北線北浦和駅下車
- 埼玉大学行きバス 20分
- J R 埼京線南与野駅下車
- 埼玉大学行きバス 10分

これからの活動について 2005.4～2005.9

■仁田小屋尾根作業道調査

日 時：2005.4.2(土)～3(日)

内 容：作業道開設調査

中津川山吹沢県有林下見

■第3回中津川県有林「山吹沢の森づくり」

日 時：2005.5.21(土)10時

中津川「こまどり荘」まえ集合・受付

送迎バス：秩父鉄道三峰口9時出発予定

場 所：大滝村中津川山吹沢県有林

内 容：植林作業

自然観察教室

参加ご希望の方は、4月30日までに事務局へお申込みください。

(詳細別紙チラシ・会報5ページ参照)

■第16回和名倉百年の森づくりワーク

日 時：2005.5.28(土)～29(日)

内 容：ブナ試験植林

作業道開設・整備

参加ご希望の方は、5月16日までに事務局へお申込みください。(詳細は4ページ参照)

■山取苗採集

日 時：2005.6.4(土)

場 所：秩父大持山・子持山

内 容：ブナ・ミズナラなど稚樹採集

苗畑(長瀬)への移植作業

参加ご希望の方は、5月16日までに事務局へお申込みください。

■第5回通常総会・記念講演会・懇親会

日 時：2005.6.12(土) 午後2時より

場 所：大宮ソニックシティ4階 市民ホール

どうぞ、お気軽にご参加をください。



記念講演会

講 師：写真家 南 良和氏

演 題：『秩父の山村を見つめて』

記念講演会に地元秩父の写真家南良和氏をお招きして、秩父の素晴らしさをお話いただきます。



■中津川・大陽寺下刈り作業

日 時：2005.7.23(土)～24(日)

場 所：中津川山吹沢・大血川大陽寺

内 容：下刈り作業・成長観察



平成16年度下期活動報告 2004.10～2005.3

■第15回和名倉百年の森づくりワーク

日 時：2004.10.16(土)～17(日)

内 容：和名倉二瀬尾根ルート整備

参加者：7名



■百年の森交流会

日 時：2004.10.30(日)

場 所：埼玉大学百年の森テラス

参加者：15名

■和名倉仁田小屋情報交流会

日 時：2004.11.20(土)～21(日)

内 容：小屋仕舞い

仁田小屋周辺整備

植林についての情報交換

参加者：19名



■仁田小屋小屋開き・作業道調査

日 時：2005.3.19(土)～20(日)

内 容：小屋開き・イヌブナ平新ルート調査

参加者：2名

■現会員 (会員番号 氏名 住所) 2004.9.16～2005.3.15入会者

725 前田永喜 さいたま市 / 726 清水徳雄 狭山市 / 727 並木義夫 さいたま市 / 728 桜井 淳史 皆野町 / 729 久本紀男 前橋市 / 730 栗田光樹 北区 / 731 井上香織 嵐山町 / 732 大嶋文昭 皆野町 / 733 金 順愛 江東区 / 734 東ガラス店 さいたま市 / 735 小林健作 江戸川区 / 736 海老沼敏夫 さいたま市 / 737 山田道彦 入間市 / 738 須永俊晴 川口市 / 739 斉藤高士 上尾市 / 740 岩野文雄 越谷市 / 741 成田 實 入間市 / 742 金澤武美 所沢市 / 743 小田伸司 富士宮市 / 744 野々山邦彦 川越市 / 745 内田四郎 さいたま市 / 746 加藤昌行 行田市 / 747 広川道明 さいたま市

～ 会員募集しています ～

年会費 個人会員 2,000円

法人会員 10,000円

2年・5年分等複数年まとめてご納入いただけます。

郵便振替 00140-0-555239 百年の森づくり会

銀行振込 埼玉りそな銀行南浦和支店 普通 3835666 百年の森づくり会 会長 内藤勝久

和名倉百年の森 第9号 2005年3月31日発行

発行者 百年の森づくりの会 会長内藤勝久

編集 百年の森づくりの会 広報委員会

百年の森づくりの会 事務局

〒336-0015 さいたま市南区太田窪 2034-1

TEL: 048-885-6697 FAX: 048-882-0245 e-mail: k.naito@naitohoken.co.jp

*E-mail アドレスが変更になりました。